

四  
四  
郷  
談  
四

秋  
196  
4

13  
196  
4



四 四 郷談卷之四

好入

大川豊

東都

曲亭馬琴編演

第七

烏夜小迷ひて魂を撰

天目洲助が再杖の草枕

継橋素大夫宗郷の織月形の宝刀の盜賊疊六次索難く旅宿を休こと  
 三年ゆるりつ天文十年の夏比比俄比々撲傷再發して歩行ならず難我  
 かね草津の温泉に赴き湯治するをいふ徒然草に  
 上野國五ヶ郷郡草津の郷温泉あり京に去ること百二十里武江と云こと  
 四十八里信濃なる輕井沢より十里ゆ過ぐる下あふ寺あり光泉寺と  
 号と南の高嶺を背中て茶師如未の本堂あり所云草津の薬師堂  
 これあり堂の前面の西のく鐘樓あり念佛堂あり東のくふ公羽塚あり

196  
4

東都

五五部

又その東と方丈あり。あまの北へ石坂とよむ。則神社あり。温泉権現と  
 まうけする。當社の雞栖の坂の下御座の湯のほとりあり。雞栖ふ並びく  
 東のうらふ地菰井と安置せり。又その東ふ寛の井幹を置てその湯を  
 受く。則これを井戸とらふ井戸。對ひく御座の湯あり。又その北は脚氣の  
 湯あり。左右ふ熱の湯綿の湯あり。又その前面ふ瀧の湯あり。この湯幹の  
 廣大あり。北は数間の浴室あり。幹三方は田垣とて入口左右は雞栖をま  
 湯幹の西は不動堂あり。此東西は客店多し。中町の北の側南側と唱  
 たり。是より下ゆも客店多し。瀧の下町則となり。又その東ふ就るの湯  
 あり。町の盡処より入山道信濃路とて三とらふ。は彼中町北南側を  
 南へ登りて支町と又その南は新田町の処中も人家多し。町の出口ふ  
 雞栖あり。又中町の南側の東のうらふ地藏の湯あり。さらば塞の河原とらふ。

大日堂あり。不動堂あり。北のうらふ馬場とらふ。又中町の北側より西へゆく  
 横巷路を鬼が泉水道と名つけり。あより西は流水あり。これを隔て  
 其昌菴あり。この流水の源を鬼が茶釜と唱たり。南のうらふ巨石あり。是  
 多ん力石とらふ。石より東ふ金毘羅堂あり。數十階ある石阪を両坂りり。と  
 雞栖を建り。南は瀑布あり。名を問へ。常帶の瀧とらふ。羊腸とらふ。山  
 あり。胎内潜りと喚做とあり。瀑布より東の山間を氷谷と唱り。  
 西を仙現山とらふ。氷谷より南の山の麓は殺生河系あり。あのはほとり  
 西南なる高嶺を白根山とらふ。この山硫黄の火氣烈しく熱湯散乱とらふ。  
 かに又正一位白根の神の光泉寺の東南は則その本社あり。あまの  
 縁寺とらふ。阿弥陀堂あり。東のうらふ白根明神の雞栖あり。雞栖の外  
 隅と新田町の尽処中へ西へ荏上道東のうらふ澤渡道とて岐道あり。此湯

じしついつうの久近世緒病ふ效ありとて夏より秋のころあつて彼此人たつて  
 結末く山里つら熱鬧へり。さほ行ふ素大夫の合宿き旅客ふ心の  
 似るものなつてまづみはひき田舎兒のまじり。そが中へ彼其を能く  
 旅人を武士とえれば武士とて商賈とありあふまもつておのひひさぬ  
 鄙らぐら都のまつり何となくおのひひさぬ彼もあつて好むひとまを  
 りて假染ふ友恒を締む行ふその本貫を尋む彼人答て某え近江の  
 ちのち所縁よ就く下野に赴た又陸奥に赴た。まづ相撲を習ひつ既に  
 二段の幕ふりて紅葉関と名づくる。まづはよめる冬の相撲ふ朽ちるも  
 不覚ととりて左の腕を折れぬ其のやうなまじりのことなる人とならばは  
 この春俄頃ふ撲傷起りて力業まじりもあつて人のよとて療治に此彼  
 とまをばせと果敢とてまづ験もひらえと。此草津の湯のりつて撲傷ふ

めといふりのあまざらるぐとまぬる甲斐ありて大に疼痛ふたれんと  
 いふ素大夫点びて現る大漢子が体相撲とまをむる人といふとまど  
 有勢ふらと放さむ。その行李まじりつてまづ長ちる刀一腰あり  
 又周八九寸ある巨竹の六尺あり有る常坐右引著て秘をまぬ  
 これおろろろまじりつてまづとまをむる隙をまのびく小箱ひら。一日又  
 紅葉関が起臥する偵座舗へおろろろまぬる小甲ありてけんをまぬけけん  
 日未の疑ひを散まじり又何の附を期んと突とつて浴衣を敷く。件の  
 刀を揚て中へ速く抜てまぬる悲や真の刃ありて俗よ竹光まじり  
 呆とてまじり舌を吐た鞘へ納んとまづ折紅葉関に彼巨竹を衝立てる  
 まじり唐織ぬ。何れぞまじりまぬるとまぬると結して素大まの顔取らる  
 小握汗跡まじり朝を拭く。まじりまぬる如く寛介と笑まじり此日の暮

かまよけも一撃試んとて和殿を訪しつは信はく吾侪素より大刀好めん  
 ちよとをれりる行年を愧さるしと辞まし許し多しと叮嚀ふ勸解らわて  
 わく笑ふ公らまき潭人疑て苛く処る不の愧へきてる吾侪のわら  
 へては隠さふよは去歳よりこの月の病を小世つるの便りを失ひ  
 医療小財布と場してさてこの処へ事ける故に踏費とて多くもあはれ  
 さるる腰の物も活却て入せりけり刃は代る行兇の撲傷小懲く人あも  
 身も傷をけりけりとも用をかるべし笑ひもあまるといふ素を嘆息し我  
 亦故ありて久く旅寝をさるりのされ踏費走くありねほど四海兄弟  
 とぞが自他の差別は物不自由なるものなるべしを遣ひまといひ  
 行纏より粒銀三四顆撈り牛と紙拾りては使は漫りも牛と牛と人の刀を  
 一過失と賞入るるべしとや情と紅葉関の志むく推辞て受納せ

素大まとのとれよ。ちやくむらむら又つちゆう足お失れまはことながら  
 刀の謂はるるは又その行の何ホの故に秘蔵せしめんとやんとはれ  
 紅葉関されば又その竹も心をあそぶ縁故あり刀の口今こゝとて  
 腰に佩とも憑かた山路越する独行をるる杖とつれを  
 あるとれその仇を御せん不携はるの巨竹の節を抜く内も米を  
 入るる。ちよとをれりる途すがた宵毎の木賃宿米を回るる。つ  
 五六合づり謀り牛て炊てゆひきこれら乃の打出の櫃一物中て三用を  
 ま心兼は竹さればいづれ秘蔵せざるべしとてえり人と取るはして膝の  
 ほろ人推傾れ米ららくとあはれ出が素をまは足とて旅は熟るる人の  
 公らまを嘆賞し疑念氷のゆく釋ふも他りなく交りて有一日ひま  
 湯を入るる紅葉関が乳の下小洲濱のふれ痔めをちよとてえりひ

疑ひその日傍に入る折紅糸関と江湖上の物語なる序不伴の瘧のてしに  
 あり顔をつらくうら瞻ゆり一和殿が乳名を測之助といひける状と同く本其  
 貞をどうぬかき打目成りの瘧をりてふ乳名を志ねるおん父のへりある人  
 とは且小膝をそと疑ひのひりてふ前妻の和殿の妹天目隼人娘の  
 女児は名が片塊と喚ばし一の其も又天目ぬ一と共々京都の官領家お仕  
 うはりのうまど和殿が父は遠且一比はれも又幼弱とて對面するともま  
 それより遠は年を経と片塊を娶りし其を妹夫と志ねるはすしもな  
 和殿が親の古主お仕しうかえおひるぬるべし内兄のころ片塊が年事  
 日未おひ生いしとけはうら深のまなびに兩個の女児唐草紅血と名づけ  
 うはは亦が往方うらなりて今いもや十年と存りその故に箇様くと官領  
 高國滅亡の後天目法印と公めてお親子四人患苦して南の果へ赴く折  
 仁田山の危難妻子の離散おらもかく説きおせかしてつがひとる上  
 流浪の故ありて又妻を娶り女児を入奉りては家へ下総の真向におん流  
 ども片塊と彼が女児のうら年のま年を存りま忘れざとて去る年漫ぶ家  
 出上下る毛國より越路の果まを索り神社佛閣お祈願をけ消る母  
 名薄をとめてその数に千社と定るや一万社及べども志ねともあり  
 とも妻子がうらあるすしうらうらうらぎりける前妻の舎兄はおおも縁  
 今面り片塊は環會ゆるとちとてこの神仏の眞助と志ね又おしとるも  
 憑く飲くこととせしとあうらの滅うち咽し緯委細お生れども有難  
 愧てや里見お仕へ継指氏を相続しと鐵月形の宝刀を夫に所領を没収  
 せられぬ聊お物うらに測之助の妹のうらまうらね兩個の姪がうら  
 堪えやとりの流る涙を志ねお拭ひられ総角の比よりして只うら友お

のこそそのまされ親の家小をあらはし。今ハひきまぬ皆是不孝の天罰と  
 多へた才で才恨のこそ。それより送まされ妹夫婦が汚命の過世のこそ  
 悪業なさん想像ごまいと痛し。あふまなく先非を悔し親同胞もなれ  
 才の實の身とあやがる。和主のあつ片塊の再會せし小異あふはさはよれ  
 其の間在を後妻とのらつる妹又令弱まこが姪とどく送再憑かた又  
 彼天目法印の吾侪は實の叔父の且ど僕とがその數も六十を遙し超る心  
 悪る一とん定めごし。只片塊とあやりの姪女と三人の頭才の母よは姓と  
 あつらひや今より和主小力を裁く彼亦が在所を索まん公つうとせよと  
 いと真成の相譚は素大夫の感謝は堪と頻り小鼻をもちかみり。かじは行  
 素大夫のちとと草津小夏を過してと魂なる秋もぞかりぬ。さうらねと  
 路費竭まんとは長旅のりなく。洲之助が房錢さくは賄ふ今ハはく  
 滞留あつし。竊に生息間へ立ちりて又又小路費をとくの彼蕩落どのう公  
 標を察究九く後截月形の室刀のふを告て頼の蛇の道ハ蛇こそあれは  
 よりる何らも翼のま。なつはくこととも多うたぐ。と腹裡小尋す思し人有一日  
 洲之助よはち。旅はあること三年よ及ハ憂るりのこそまこと鏡原あはれも  
 ぬりとは。和殿は環會ゆるかひふるは相譚ふへた依しあれども。この怨ごは  
 それもゆるし。痛忍もまうと愈とまらる共は甚飾るる。その間の家路は赴く  
 をし。といごは。これハ洲之助の志はく。と應り。次の日草津を發足を夏寒  
 かりし山里をまきく。なれは秋のら。よみ残暑は慥らとて朝とて走りて昏も  
 暈り。夕の遠く宿とる。ゆりて武藏の國府隅を過はとれ日とをや西  
 没よけと。只管途次會りて桶川までと走る。行ふ今宵の野于玉の鳥夜  
 なるふ天さ。俄頃小結蔭く咫尺の間も黑白をうら送と途を迷はんとて

湖の夜



丑 丑 郎 次 卷 四

湖の夜



丑 丑 郎 次 卷 四













this book is very curious.



the book is very curious



立  
徳  
言  
春  
山







推辞のせいでこの桶川より芝間の里まで俵と坂東道一里九十里不足  
 さればけの唇を起とも翌の亭午に彼処へ到らんそのそとて保養  
 多し草やあると行囊を掻撈り湯を乞はせ九草を飲まじで町守を勤  
 素大夫の飲しけ小病を忍び墨斗をとう出てうがら(洲之助が素性より大  
 うふ書字を巻と封してまのりあうこの一通は兄公のものをうがら好ま  
 紹攻なれは妻鮮衣と遮りて唐稿素二節とうらひてあふざらぬもの  
 るとれとこの家の真間の里なる弘法寺のほりにあり東面なるは衡門の  
 右のうら小梢高き槐のねを問とも素まらふとらあふじとくくと  
 いそぐせ洲之助とらうは果と彼一通を受とりつ袂包を脊へ投掛端折結  
 かひぐく左の中菅笠うらうて右の中巨竹の筒は引提て素大夫は別を  
 告宿のゆるに彼人の音病を委るとて懇々憑せえて遠くけは走去る

かくて天目洲之助は桶川の驛を去ると中ぐすの運びとらせじつ町屋村の  
 あらかる。曠野とむらり過る行ゆいと怪しげなる旅客二人端あくととて  
 行あひたり。彼亦豫と洲之助と相識するのなりとん。それとて走近つた  
 三人松の樹蔭に集合しゆる中へ人雲時密語報然と笑ひるに彼  
 兩個の旅客のうらう途を引く。洲之助が後を跟れ先を立つ。りあはれ  
 東のうら赴く折腰負猪もあふんごうんその大き積る等しく。腫の如し  
 牙をうらじ針より流き鬚を逆がて蹄を鳴くし鼻嵐を吹く木根を絞  
 婦ひたり。嗔狂ひく走のりら兩個の旅客これかえて吐嗟とくうら馬に  
 まどひて一個へゆりう松枝に辛うと脱登り。一個はこれを左隣で二三町遊  
 走むら野猪の彼本をえもくうら暮直よ嗔りする洲之助を掛んこまはれ  
 洲之助の些も騒がど結ぶるまの切引彫離て撥投捨つら閃りと遊彼長用で

看やして雄手へ繞り雌手へ走じ。さるぬかたさる遺錯して西三遍疲く。足をはりく磯と蹴るその音竹を破る。野猪の助らち折る。倒れ起しもまきと葉掛く。吃気楚と蹂躪血を吐く。揚ぐ死でざり。これを迫るる旅客亦毛骨凍く舌をさ。時葛城山の御持の野猪もかくやありと賞嘆。下り立ぬまきもかくの身や或は呆れ或は泣ひ。今にどめぬ大哥の本事。牛の鬃一糸暴緒と尺一足中蹴殺さる。新田四郎忠常なり。これ及ぶた吾們ふり大哥の遭ふ。野猪の牙は掛られて命を野の。と消えん嗚呼危なる危なり。汗を拭く。測之助。最期死狸の陽滅叶ねたのか。藝の定は一生命已に。

くぐりぬかたさる人ふ告る。二人うち高次大哥のま謀猪。野猪もとのまふ。信る銭よる。肩勞の小利大損。安雑尾のうさ走せ去りね。不題下総なる真間の莊。素大夫が妻鮮衣行状平く家を守りて。女兒楓を養育。毎日足。させ縫刺のる。誨絲竹の調。大さな。楓は年只左右の指。一ひ足らぬ稚ころの。幼弱まふいと怜惻。二とび教る。日。いも。忘る。素より孝を。七の年。父の往方を朝。夕。日。徒然を慰る。言。渡。丁七。老実。下司。美士。寒。不足。女。侮。主。親。子。果。世。狭。楳。悒。

うろたへる間の井ふ新き入墨る浮雲のそりたる山とかなれまゝふ公の塵  
積りての埋もてく鳴く虫の声今茲も秋ふなりやうりかて其婦三月の廿日  
あまの一日鮮夜の生平よりもろく起されど珠文物をおりかげは頻ふ嘆息  
あつりしる丁七の研々と例の瘡や幾りもひ血暈おのればもい何あたる  
脊捺りて進ませよとを鮮衣推禁めさる愈れがかとくうろく煩ふれを  
生平かほふうち捨ておれ終じ吾侪が今朝の病著と積らる瘡やも  
ゆふの頃目打つて寝寐苦しれ曉の夢さへかかるゆえ之譬は昨夜まが  
所天の枕上ゆきまひとこれ如此くのうらやうり上野なる草津まで洲之助と  
いふ旅客と田基の勝負を争ひて渠が又も命を預けぬ三年以来千磨百折  
旅より旅ふ月日を送るその甲斐なくして枉死せし送恨のはらひ三執の  
冥土の苦難泥がう永劫深しぬわらじ庶莫望はるうらむは汝達を  
藉ぐ怨を復さんととらひしよりてうろたへ魂這奴が身小絢りとの処へ誘引で  
翌亭牛こて草津よりするものありて洲之助と名告ぐる正しくうらむ  
よく丁七と謀らる物ごとくうらむ果しうらむ怨魂を慰めらる千部の  
流経百日の法を延ぶまて仏果にぬん仇人の齡は三十あまのその面影と  
箇様々と委細は告ぐぞの恨もやうらむと叫びぬく搔披く胸より  
鮮血漬りの刃の只朱お流りまてとらふ忽地爰えうら汗お衣を絞らる  
うち騒ぐ宵を銘めても心より安らむにこの故よとそ色をええてや懇々同  
慰る和殿よかくとらうもあらばゆきり小夢の正しげうらむおさまなくとら  
とと告るを丁七も果も果も亦との曉は夢に御主人お見えをり  
絳の越今奥この告るふ心と一念うらむと思後といふもあまの何の  
五臓の芳れより幾らうらむるわらわ年来日より主従がとら忘るはもる

四五 那炎 卷四

十八

心氣勞れどかきまてふ怪しき夢をうへりの牧又正夢といふとわまばそれ  
 ららねらどむらりぬ主従一たう嘆息一頰を病し手と又たさひ入る眼底  
 たのらざらぬ涙あり且て鮮衣の目を拭ひて涙を擧吾儕が夢もその  
 夢も暗し符節を合せとてまてら何を疑ん所天の神霊の告るるべんか  
 けりともあつてぞあつてん歎きの中れきこるともども痛まも三年以来  
 旅宿して索あまれど月形の宝刀の往方ちる雲の吹を閉るる常の風  
 病く家よそをさうりあつておよそ公の及んたり減茶茶餌を困るる  
 冊に竹く人ぬあつたりあひその日とていともあつてけふまもやうらほ  
 送り月と日とあつて照さぬ世こり勅命存命といふそらそその歎する我の  
 物も幸来の志をば遂とてお只假流の碁の勝負扱つ夾らう縛けて打とも  
 海と破れれて後身よかりと死石の恥か雪ん切もなう人々世をば  
 舊里へくるよらた芥の柄の朽きかりけん夫の運命そのまら魂の幻  
 告るるせが既よある仇人の面貌その名の測之助すや弱れ吾儕あり  
 とも武士の妻とて心と鉄石のうでう響を響さるるき準備をとやせよと  
 節は我も勇めど哀れ傷らぬ烈女の白真弓張る矢的魂も丁七やう  
 感嘆おん憤りさるることあつたらと毎ら必過失あつてん夢の虚実の測之助が  
 するとすさるるふ決てんけり一期の吉凶只某に任用し心長困候  
 めんとしり障子推ひらぬ日新途よりち仰ぐ庭は楓の涙をのど雞は餌を  
 與てり常も異なる母親の声がぬぬわがうてや縁頼より遠りする  
 母らんらあも又心持ゆらやせりさんと同つ負をさし取ける鮮衣とれ  
 ええとて今丁七と相譚る緯の越白地よきせとちひり虚実もの  
 定らるる夢物語を推れりのお説きして勅命おとせせん使らるる正

心氣勞れどかきまてふ怪しき夢をうへりの牧又正夢といふとわまばそれ  
 ららねらどむらりぬ主従一たう嘆息一頰を病し手と又たさひ入る眼底  
 たのらざらぬ涙あり且て鮮衣の目を拭ひて涙を擧吾儕が夢もその  
 夢も暗し符節を合せとてまてら何を疑ん所天の神霊の告るるべんか  
 けりともあつてぞあつてん歎きの中れきこるともども痛まも三年以来  
 旅宿して索あまれど月形の宝刀の往方ちる雲の吹を閉るる常の風  
 病く家よそをさうりあつておよそ公の及んたり減茶茶餌を困るる  
 冊に竹く人ぬあつたりあひその日とていともあつてけふまもやうらほ  
 送り月と日とあつて照さぬ世こり勅命存命といふそらそその歎する我の  
 物も幸来の志をば遂とてお只假流の碁の勝負扱つ夾らう縛けて打とも  
 海と破れれて後身よかりと死石の恥か雪ん切もなう人々世をば  
 舊里へくるよらた芥の柄の朽きかりけん夫の運命そのまら魂の幻  
 告るるせが既よある仇人の面貌その名の測之助すや弱れ吾儕あり  
 とも武士の妻とて心と鉄石のうでう響を響さるるき準備をとやせよと  
 節は我も勇めど哀れ傷らぬ烈女の白真弓張る矢的魂も丁七やう  
 感嘆おん憤りさるることあつたらと毎ら必過失あつてん夢の虚実の測之助が  
 するとすさるるふ決てんけり一期の吉凶只某に任用し心長困候  
 めんとしり障子推ひらぬ日新途よりち仰ぐ庭は楓の涙をのど雞は餌を  
 與てり常も異なる母親の声がぬぬわがうてや縁頼より遠りする  
 母らんらあも又心持ゆらやせりさんと同つ負をさし取ける鮮衣とれ  
 ええとて今丁七と相譚る緯の越白地よきせとちひり虚実もの  
 定らるる夢物語を推れりのお説きして勅命おとせせん使らるる正

正愛うつくしむ。いづれ中雲時遠離ゆ。とひい入とら微笑今朝  
 ちも瘠ハ發りふけと温石煖く。ちもわらうね涙ももころけよけよ  
 賓客の才もあふ足も絢る。汝達がふをすら便安に侍とて見名の  
 社へおきてゆきて日の没ころまで任せよ。喃楓谷の割れおほふは好す  
 の細沢とてよ。比は進むとど。いよあわびと。懸されても。忘るはのみ  
 ぬもまも。丁七の鮮衣が。氣もよ。猜して。やよ。涙もまのふの。雨弘法寺の山  
 菌の生ころん。けつ許させまわよ。娘と俱へあせ。日くじ。任せ。俗が  
 ぬよ。ひび。げ。あ。敷。入。さ。う。ん。さ。い。ほ。く。と。ら。そ。が。ま。ま。の。楓。さ。う。ん。波。も。も。  
 生か。一。迹。ま。ま。あ。ん。と。ん。あ。い。な。が。是。佛。の。場。の。茸。持。せ。ん。と。鏡。持。龍。引。探。と  
 庭。門。も。い。と。樂。び。ふ。ぞ。走。り。去。子。も。ら。う。じ。う。教。を。共。小。目。送。る。主。従。の。命。運  
 竭。く。仇。人。の。あ。ふ。り。聲。も。う。た。が。れ。ぞ。の。親。子。一。世。の。辞。別。と。い。ひ。は。く。面。り。  
 うらむけが。これ。玉。匣。ぬ。親。づ。う。世。と。ま。く。誰。と。ま。と。う。ふ。人。と。う。ん。痛。ま。い  
 や。と。と。ら。が。え。ふ。ら。う。て。岩。根。の。葛。り。み。ら。紅。涙。禁。難。れ。れ。も。送。り。愧。て。け。も。泣。き。ど  
 稚。れ。の。の。遠。離。つ。と。う。あ。と。と。鮮。衣。と。遠。く。刃。を。起。し。母。の。像。見。の。身。を。護。る。  
 懐。刀。と。の。生。と。劍。先。段。子。の。表。裏。も。仇。人。の。破。軍。の。名。詮。自。性。と。祝。し。て。あ。が。て。身。を  
 引。著。一。振。貯。お。む。薙。刀。と。長。押。より。さ。り。お。や。塵。う。ち。拂。ひ。搔。拭。ひ。鞘。推。甘。け  
 め。と。と。ら。行。ふ。丁。七。の。意。の。け。と。り。人。砒。座。の。桶。を。お。居。て。刀。の。寝。刃。合。さ。ま。は。秋。の  
 日。影。の。と。も。闌。く。正。午。晨。告。る。雞。の。声。ま。ご。下。さ。う。暑。かり。れ。浩。処。の。洲。之。助。の。ね  
 づ。ひ。つ。繼。橋。門。の。槐。を。ら。ち。向。上。て。さ。う。さ。と。と。門。の。入。を。諸。折。戸。より。さ。う。さ。り。入。る。  
 是。は。ま。ま。丁。七。の。意。の。際。より。ま。い。眼。を。渠。も。や。あ。う。ん。と。鮮。衣。み。目。次。注。し。は。出  
 迎。ま。の。洲。之。助。の。引。提。と。は。彼。竹。の。長。筒。以。縁。は。倚。く。け。ん。丁。七。を。ま。を。ら。う。ら。や  
 笑。み。其。の。桶。川。より。さ。う。の。わ。ら。の。使。は。さ。ま。は。ら。る。洲。之。助。と。ら。う。の。こ。ま。入。り。あ。

のう共ふ。くりのまぶるしゆ。まう其を遣せ。縁故の後よこそや。彼人の  
とどめより唐織素二郎と名告られぬ。このころ人未と回人との縁を  
あらばといふ。あられども門の槐を目的に訪は紛らうもあらざはよ。縁を  
示されしゆのまぶるしゆ。汗を推拭人狎易に校見のしゆ。いづれか定り  
なす縁と丁七のそと。後のかきまぐあへん。今又公頼ふをあれども。気さか  
頭さか。定は唐織素二郎と。つが主人の舊名あり。内室に彼処あり。緯  
面り小々えま。且あつて人と。誘ひに洲之助の草鞋の幼解捨つ。手拭り。  
裳の埃うち拂ひ。ゆか。と長甬を引投。進む客房の左手の簾まうり  
落し。良人の誓敵脱さ。と声も鋭く鮮衣が。ろ。薙刀眼さ。人閃く。と  
刃の光。洲之助の吐嗟と。ろ。身を洗。とこれを避。と何と。とらせも果  
めて。右のろ。と。丁七が。と。薙刀風の。と。左右を御。と。扱。と。

と。は刀の竹。比尺一打。鏝えより。砍落。されても。おとせ。と。合。する。鞆。を。と。が  
ま。う。と。打。てる。眼。礫。お。丁。七。の。阿。と。叫。ゆ。と。鏝。額。を。傷。ら。れ。て。怯。む。と。は。り。  
と。洲。之。助。の。様。臂。を。伸。し。て。搔。抓。を。矢。赤。を。う。け。て。投。げ。る。足。を。さ。う。め。お。助。斗。り。て。  
打。抜。く。傍。の。壁。の。中。へ。半。身。撞。と。投。入。る。鮮。衣。と。れ。と。ん。も。か。く。は。ら。不。是。を。  
薙。刀。を。用。道。を。受。と。か。ん。こ。の。理。不。盡。ろ。り。何。ホ。の。故。お。吾。を。仇。に。殺。ん。  
と。と。る。や。奴。隷。お。微。ぞ。物。お。狂。ら。女。と。と。も。じ。と。じ。可。惜。命。を。失。ふ。と。と。声。  
う。り。ま。て。罵。と。鮮。衣。の。息。吹。ゆ。と。目。尻。を。揚。齒。を。切。り。この。期。お。及。び。と。  
と。不。陳。ど。る。や。と。良。人。の。草。津。と。て。圃。其。の。勝負。と。平。ひ。つ。と。は。薙。刀。を。使。は。し。  
と。良。人。の。冤。魂。夢。お。告。汝。を。と。人。誘。引。と。と。と。平。示。現。は。寢。刃。合。し。と。  
今朝。より。結。し。と。あ。ら。と。と。や。怨。の。刃。も。受。よ。と。敦。圍。を。か。引。く。薙。刀。の。  
向。脛。薙。ん。と。閃。せ。と。跳。わ。り。て。受。ら。と。と。甬。の。と。と。裂。衣。と。割。て。肉。を。り。

一口の刀と鮮衣倍と見て、常用の刃をかくる癖者、害心なく、頭を斬り、首を  
 通せと又、誓ひ、刀尖を踏とめ、これに、流る良人を殺さざらん、と  
 言ふ。と半し、さきより、丁七の身を起し、声を出し、丁七と誓ひ、刀の下を  
 彼此と潜脱て、抜のせ、劍を削る奮、誓、突戦、心烈、忠義の主従へ、巴を、流り、  
 洲濱、ふ並び、一上二下と、は、盡せども、仇人の剛勇、ち、め、倍て、つ、は、入、ん  
 と、する、鮮衣が、薙、刀の、鞘、を、切、落、し、か、く、刀、を、丁七を、肩、大、破、と、破、倒、せ、鮮衣、の  
 遠く、短刀を、引、抜、り、突、懸、れ、も、来、り、勞、倦、て、既、不、危、く、ん、と、折、鬚、鬚、  
 と、一、采、の、旗、雲、庭、を、舞、わ、か、ら、り、降、り、て、窺、り、入、る、と、よ、へ、その、長、丈  
 餘の、金剛、神、忽、然、と、立、頭、れ、勝、濟、る、洲、之、助、が、石、を、破、と、弾、し、る、腦、も、碎、る  
 とい、え、と、魂、滅、な、り、叫、び、つ、つ、や、え、え、り、と、う、ち、駭、れ、破、拂、ん、と、つ、れ、も、力、衰  
 腕、癱、て、合、さ、る、刀、の、ま、あ、ら、は、ん、は、果、る、う、ち、と、呆、ま、と、ひ、て、逃、ん、と、れ、鮮衣、の

透、間、も、く、突、く、は、鋭、刀、夫、と、辟、易、し、て、遂、に、刀、を、う、ち、落、れ、乳、の、下、より  
 脊、ま、で、鞘、も、徹、し、と、ま、と、刺、し、て、叫、び、苦、し、も、潰、る、血、は、彼、此、へ、り、は、死、倒、し  
 と、る、丁七が、顔、へ、現、と、か、く、は、丁七の、息、を、え、え、と、岸、破、と、起、り、洲、之、助、の、足、を  
 拂、て、誓、倒、し、押、て、頭、を、か、と、れ、金剛、神、の、形、を、消、て、只、屋、の、棟、に、事、げ、ら、る、  
 と、り、の、啼、声、を、り、り、り、か、は、奇、特、の、主、従、が、目、を、さ、め、り、お、ん、を、採、と、も、鮮衣、の  
 外面、を、数、回、伏、拜、し、羊、来、祈、念、し、る、新、御、堂、を、る、金剛、神、靈、驗、と、す、  
 空、う、ら、で、か、ら、ん、仇、人、を、誓、ひ、あ、ら、ん、と、良、人、の、霊、魂、ち、う、ら、を、葬、し、  
 さん、梢、お、う、れ、旗、雲、の、意、を、り、入、り、し、ぞ、不、思、議、か、ら、れ、丁七の、瘡、は、う、ら、め、と、  
 勲、て、同、ハ、荒、尔、と、笑、も、山、あ、ら、ん、母、と、う、れ、僅、お、一、个、処、事、あ、り、て、浅、瘡、を、其、へ、  
 當、所、の、長、へ、復、讐、の、よ、を、祈、金、瘡、些、愈、る、と、俟、て、主、人、の、誓、と、す、  
 彼、地、へ、い、り、て、骨、を、拾、ん、ま、ら、る、霊、を、あ、り、と、回、答、を、尋、く、首、級、の、鮮、血、を

うた拭んとてどろどろも死骸とてわが懐よりゆつりれは書翰の彼を  
何ぞと訝まは鮮衣これをと揚て宗郷が真間の宿所へ吾妹子みづくは  
と写したる表書の年くくは仗の事述るの故らそわらわと忙しく封拆回も  
躍りて繞心側より丁七も膝よりよせてさし置た原来主人の好も  
路費乏しくおせんぞき武蔵の桶川までゆりゆきその夜より公持炊  
きたるお返申。さうのるをあらせんと遣される使とらさるる人  
と向の鮮衣書流とめどいままこの洲之助の良人の前妻あるに境  
かへんが兄天目氏の子あんなとこれよりと手お返を書簡とあら  
かへんが兄天目氏の子あんなとこれよりと手お返を書簡とあら  
かく歎けさせとて叮嚀し書写めて告来し玉梓の使よりい  
墓にたぬをゆめてお同も定めと殺らん今將妻後後ならん  
主後と後悔慚愧なりせむおぼし憾ふらぬれ感ひて又お釋ざりけり。

第九

崇むるて妻を喪ふ

萬春良雄が帰郷の後悔

活処お外面より遠くするのゆゑ誰やと問が素大夫と妻のさうと丁七も  
いそまじと待まじむる。あつたあつたお恙なく。その事おる飲まらん比んありの  
なまじども。その扱もなく洲之助を殺せしお只愧ひて出迎係が素大夫と  
鮮衣やめる。これより楓のさうと丁七と嘆ひて登る縁炊より。とてこれ  
之悲や客房の簾の影離と壁毀れ篋扱休る洲之助の身首所を異  
中と鮮血は席を浸し。この何れもと叫むを駭まじひてまき遠く膝  
壁の毀より鼻血の如く跳入り。畏りたる鮮衣と丁七とさうかうえと  
ほざき声を激し。こゝかかるとをあらう。汝連の生も迎む。さうと人  
かろりしお桶川の旅宿より書齋へ遣し。洲之助を殺せしを





かみ

つるぎ

あいの衣



あいの衣

夢を占めて  
鮮衣  
測之助と  
殺す

測之助

よび



りんてころ坊ど當座よ口論志うりも。もが前妻の兄とあつては忍びて  
 あぐたふ。あう移りも殺せぬ女子お他げされ虎狼の行状とれと佐一丁七ゆ  
 人面獸心論ふ及ぶとまのふとの洲之助が桶川を護一後い移りもあつて病者  
 志一とく愈一う直さふ彼処を護足一途のゆくこの神社へ名簿を  
 とめて順拜祈念なり。あつて千社と定めしうとも三年のけあふ及びしう。や  
 一乃社おえたりとれいふあつて月形の室刀の往方をあつて又一乃の女房  
 女児がを異安全を祈るの基を結ぶ旅寝の憂も。あつてあつては片肘も  
 いらんあつてかへる日次告よとて人を遣せ。あつて阿修羅の衛となれ  
 過世しうる業報を事情を推量る小鮮友と一七と密通しうとあつて  
 さうんこれのよを洲之助おんこれ殺せぬとれ。あつてあつては三年移り  
 まて件の室刀を索う。あつてあつては路費場へ阿空ととめるまはらうとあつて  
 五二 五三

乃其假初る。ね。因。後。あ。れ。こ。の。人。を。殺。し。て。又。罪。を。負。し。自。滅。せ。せ。ん。と。  
 謀。り。欲。り。人。を。殺。す。を。推。へ。楓。が。と。も。な。ら。ぬ。も。不。審。一。七。と。相。續。く。宿。  
 控。女。も。傳。う。り。けん。緯。委。細。は。訴。う。る。ま。地。木。の。う。ろ。く。人。看。し。は。死。奴。原。う。れ。  
 とも。それ。も。意。ま。す。し。切。ね。も。れ。日。蔭。の。ま。と。め。花。も。ほ。咲。き。実。も。つ。る。は。  
 只。ま。枯。ぶ。か。る。べ。た。の。と。悔。る。毒。の。鬼。百。合。中。馴。ら。奴。隸。が。あ。ら。う。毒。草。これ。  
 罪。せ。ん。と。せ。ざ。れ。ど。も。深。瘻。を。負。し。天。罰。之。維。今。故。本。を。推。う。て。四。段。よ。る。ま。  
 とも。恥。う。ま。う。ま。の。と。め。守。へ。歸。悉。の。よ。と。か。中。も。な。ら。ぬ。か。き。て。武。運。の。竭。  
 ね。と。多。く。罪。造。り。お。何。を。せ。ん。今。も。多。く。期。を。究。め。る。南。を。河。津。陀。仏。と。唱。め。ん。と。  
 刀。を。抜。く。小。腹。へ。突。き。入。と。あ。ら。じ。く。鮮。血。丁。七。左。右。より。慌。忙。に。推。り。著。お。ん。  
 憤。り。へ。て。う。ろ。ろ。と。疑。せ。ま。す。も。し。い。く。ま。ら。ぬ。ま。だ。の。ふ。憑。り。後。の。咎。を。し。  
 怪。し。も。あ。る。う。ろ。ろ。の。曉。中。お。ん。牙。正。し。告。め。り。これ。は。草。津。の。旅。宿。也。因。基。の。

勝負を争ひつ。洲之助といかりの刃中命を預け。三年以来艱苦編歴常ある  
 宝刀の返もさうて。せうね。仇。の。身。を。喪。ひ。し。怨。み。を。中。有。中。呻。吟。冤。魂。彼。奴。中。  
 絢。子。の。処。へ。い。れ。ん。と。羽。洲。之。助。と。名。を。り。遠。方。より。来。る。人。あ。ら。う。物。の。云。  
 せ。と。こ。を。替。仇。人。の。齡。は。三。十。の。ま。り。その。面。影。は。固。様。と。し。示。現。は。吾。侪。も。  
 某。も。心。の。た。ら。く。多。折。果。し。て。ま。つ。る。その。名。は。洲。之。助。年。紀。も。面。影。も。付。藤。を。  
 の。世。正。夢。や。今。又。何。を。疑。へ。れ。と。名。告。う。り。て。砍。結。う。仇。人。の。剛。勇。お。り。少。也。  
 ま。て。某。の。瘻。を。負。ひ。し。吾。侪。も。既。に。危。う。り。一。年。来。祈。念。し。ま。る。金。剛。神。の。  
 擁。護。と。お。け。く。庭。の。槐。よ。か。ら。る。旗。雲。障。り。て。裡。面。へ。入。り。お。り。仇。の。怨。地。  
 勢。の。竭。く。遂。に。刃。を。授。う。り。と。の。と。れ。小。隊。臆。る。雲。霧。は。も。霧。を。て。屋。の。  
 棟。お。異。る。る。多。の。啼。声。せ。し。も。い。と。怪。し。か。く。死。骸。の。懐。より。頭。れ。知。る。一。封。の。  
 書。翰。を。と。り。お。ん。牙。の。自。筆。良。人。の。仇。と。し。仇。を。と。り。て。良。人。の。縁。者。

縛の本末問も定めど、只管をとりて殺せし物の祟致在難の神の怒りの  
 うつ致悔しきるむを志せり。と身で身を責ても恨ても、さうさう過失は  
 二年未日とあり。いとうありしとあつた所天付さびりし山主人は、  
 面はなれど、いりて死ん、冥土の迷ひらて證據もなれど、三年の田を  
 うとどひく密通を志せり。罪負せんを由縁める人を密に殺し、  
 恩愛ひとりの女兒を人售りやせしと情かく。さういけられたるのこころ生  
 り、身を殺すよりる身若く、それ盡されぬ滞衣の癖る君が誣言を人  
 殺せし罪科を脱しんと、もとの縁と標を破り、身を織すが、良人の瑕瑾親の  
 恥辱女子の大罪とのうへに、不義奸淫の國家の大禁童といふとも、非を  
 辨ふ況や恥を志るりの下郎のとも道う、ね道はうで、迷ふべしよ、  
 目前滅心をうり、こころを境わ、さう疑ひを解る、見も、夜の夢も

似く墓るは、呷言の泡沫夢幻の身命、さうなれど、女房家諫の非は  
 遣るが、却ち身を殺し、あつた誰ありて、月形の盗賊を志すべし、何人う、  
 自殺を潔しと誓ひ、せん、つれるは、あつた、限りの情は、はは、と、  
 諫の左右より、携り、笛は、奏の上、お、あつた、流る血の涙、流るが、  
 と、けね、恨は、素大夫の、あつた、因果を、あつた、あつた、あつた、  
 汝亦が、情、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、  
 良人の、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、  
 搔と、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、  
 あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、  
 これ、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、  
 丹田へ、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、

りこそあれいねる日暮きて武系なる。吾孀再杖の間なる曠野を過じ。  
 比の甲夜闇にまほ姑獲ふ石を履きれ洲之助の愕く人魄をうら落し。  
 かきて且く懸ゆる茶毘野の法師とれをきて件の姑獲も人魄も今宵ま。  
 むく火葬する悪女根坂が冤魂をうら人の婦にみ此くと未細に説きを。  
 り打落せ一人魄を懇ふ葬るに宗ふよりて枉死せん兩三日逗留し。  
 形のごく追苦をとり行ひゆひ秘と明く地を勸しうぶ。これあつせんとおひ。  
 うも洲之助つやく後を刺彼法師を罵る罵らま。茶毘野所開し。  
 ち。かゆ故に彼怨火吾們も馮絢り曩うのつがふふ入りて妻子も病難  
 ありとせまふ吾儕を病づらせて洲之助をすづへ引よせ豫て妻子の  
 夢に入りてまね草津の旅宿めて洲之助を智恵と告て二人が手を借く。  
 初もや渠を殺させせん法師の教滅當とるら。さればこそあれその餘怨

あう移く吾儕も宗らん。不逞も妻子を疑つ自滅させんとせり。欲  
 洲之助が替れとれ鳴つるも。姑獲うえ現推が怨火の宗よりて  
 おん身もさるり共母死を急ぎ。殺人に殺せ脱るべき道。なくとも二人も  
 一人の死でもまの果るに。その深瘡で術も。雄く。其妻の賢才負操  
 主の馬に丁七が誠心十年以来。これよくあれ。何は。行ひあふ。  
 疑ひ。いと羞く。これ元来入まる。ふの過失より家衰へ三年以来  
 一日も妻の安れ。おひとさせ。これも勞してその功なく。面推。あて入る。  
 新護。たよ。もた。罵辱しめて自害させ。忠義の僕。又失ふ。と。嗚呼と  
 いふも。あま。あ。し。と。悔。鮮衣も。丁七も。飲。け。と。握。あり。ひ  
 かり。化の妻の祟と。あ。て。ぬ。衣を乾。せ。一期の大慶。愉。目。閉  
 け。ん。と。今。殺。も。か。は。楓。が。う。之。泣。を。冊。け。と。山。せ。

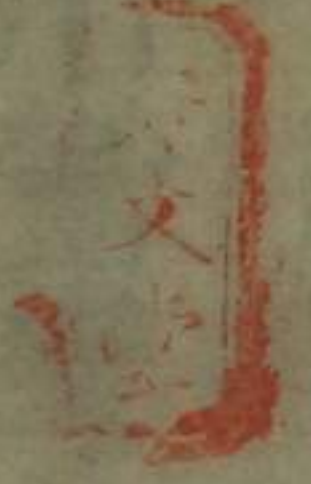
弘法寺へ遣はれ給ひては、母を喪ひ又父と旅行し越えたる  
 誰をもよぶ生育ん病りやせん。子に多ふはつらむ。圍み迷ふ丁七の  
 伸のりある涙も奴が公鈍さま。今こそ娘はしそがして。帰り来ぬれば  
 ゆり来よ。いひ送下りて。あつと母の氣を焦が素大夫涙を禁めぬ。  
 楓がうらなうらなうれ。いひ送めぬ。かみお餓も死なば。人とありなば佳塔  
 ぐみを擇む。後の栄をまへん。渡りもあふむ。渠も又人の子なほふ。これ  
 等閑ふらんと。慰めんと。恩愛引とらふ。玉の緒の僅は残れぬ。  
 哀れなり。浩処お子どもら。しそがらげぬ。母も母も何処よ。うらまぬ。  
 娘は只今。今へのいひぬ。さぞ徒然と。うらまぬ。いひつ。そこらに詠く。  
 楓渡る。りろ共か。いひげぬ。光なき。目か。みごの驟雨。追はぬ。  
 かく客房へ走り集合つ。血は塗ま。親と親と。推方。若緯。同よ。も

うらく。お声は惜ま。泣く。丁七の眼を睨り。涙を泣き。泣き。泣き。泣き。  
 とま。親が。か。て。い。手。く。在。り。の。え。吾。一。命。の。惜。む。足。ら。ぬ。と。惜。ま。ま。  
 真。さ。ぬ。と。命。り。て。自。殺。し。ま。ひ。た。と。や。認。も。つ。ま。れ。ば。主。人。へ。う。ら。ま。ぬ。せ。ま。ひ。て。  
 彼。知。ぬ。お。ま。せ。ぬ。縁。由。の。後。に。ま。あ。ら。ぬ。汝。が。主。君。の。この。娘。の。ま。主。の。あ。ぬ。ぬ。  
 艱。苦。を。厭。む。る。父。が。忠。義。を。本。と。せ。よ。い。は。れ。ぬ。唯。足。の。ま。と。言。は。れ。ぬ。せ。ま。じ。く。  
 ぬ。り。絞。る。声。が。鮮。夜。中。に。う。ら。ま。ぬ。楓。よ。う。の。い。ひ。ひ。き。き。んと。あ。あ。の。胸。が。  
 あ。あ。れ。と。そ。し。も。か。ら。ぬ。と。物。の。崇。む。恨。な。れ。人。を。殺。し。つ。刃。を。殺。す。母。の。亡。日。の。  
 忘。る。と。も。多。く。お。孝。行。懈。り。ぬ。あ。あ。う。ら。ま。ぬ。や。か。ん。お。七。才。の。冬。生。別。世。  
 父。う。ら。ま。ぬ。と。あ。く。帰。郷。し。ぬ。人。と。名。生。口。も。あ。ぬ。と。う。ら。ま。ぬ。死。別。れ。る。有。為。  
 轉。変。浮。世。の。秋。の。風。が。只。こ。の。吹。け。の。飲。と。い。ひ。果。き。又。伏。枕。ぬ。楓。を。  
 よ。と。泣。叫。び。緯。定。く。ぬ。あ。あ。福。も。死。な。ぬ。か。ら。ぬ。ぬ。の。あ。あ。と。う。ら。ま。ぬ。と。

代らしくおん身の存命のうらな喃父より捨て出まひしより三年の月日  
まねれど世無時も忘まねる面影を思ふはげしくんや邂逅ゆるせまひし  
さし悔れど世無時も忘まねる面影を思ふはげしくんや邂逅ゆるせまひし  
茶のうらたし秋のほほしと父の袖を引くは推し母の膝鮮血を飲せ親を  
あふ雅と主と友音してゆく涙も声も濡れど涙の雨ふ  
翅あられて哽えりけり終日娘を偲いすわくせり松山せよ見名の  
社へ詣よと宣はせし母賺されし漫母彼処へ詣しと耳持もせし物も  
えと蛇がきせせて主親の今般あや。あひうらう。又あひうらうの世乃  
別とふ。うらえことこの哀しと口説つ泣つ轉輾と恋のほせぬ瘡負の  
片息慰めり。素大夫の玉る涙をあり拂ひ涙を流るやと相賢え  
りの不泣ぬる。あは大妻山更もま。親子主従恙なく四人面をあひしる。

笑片向く樂一かみん小子は脚とてても身を羞体親うひかたはこれの  
なう。因心長か馬に女房家僕救より。あは。吾侪よ女才あるは終  
歎く。冥土の障とならん未期の水をとちうらう。まわりのつ録敷より。  
覓の水を汲んとされ。さひがけり。折戸の蔭に編笠を深くして野袴の  
裾引あけらう。悲歎の声を竊々武士あり。誰と問んもささう。さ汲え  
拈板の水鏡らうせどもいと間遠なり。顔不定うかええぬらう。

平林



○著作堂編述出像國字小説畧目次 群玉堂藏版

賴豪河閤梨恠鼠傳 前編五冊 後編四冊

三井寺の河閤梨賴豪が鼠と向ひ奇談より木曾義仲都登りの因縁清水の冠者義高  
の術と行の奇談猫間新太郎の復讐の辛苦烈女唐糸の忠臣と古今に秀し物かろん

夢想兵衛胡蝶物語 前編五冊 後編四冊

ある名ふり作者の博識ありふ見ひく世界の鳩々理屈あつたりやうなれども腹どか  
りて自然とらへる事々の妙文百六十及びてつとまぬ面白く又是常のよき本を拾得た智恵のみ

絲櫻春蝶奇縁 旬殿實實記 前編分卷六冊 後編同 六冊

四郷談 常夏草紙 前編分卷五冊 後編同 五冊

推技 全 五冊

歌討裏見葛葉 全 五冊

挽久松山物語 全 五冊

大川豊



